

まえがき

本書は、筆者がこれまで40年近く行ってきた日本語のプロソディー（アクセント、イントネーション）に関する研究を、母方言である鹿児島方言を中心に据えて一般言語学・言語類型論の視点からまとめあげたものである。

筆者は鹿児島県川内市（現薩摩川内市）に生まれ、地元の高校を卒業するまでの18年間この地で育った。この間、話し手としては鹿児島方言のモノリンガル話者、聞き手としては鹿児島方言と（テレビやラジオで耳にする）東京方言とのバイリンガル聴者として育ったことになる。大学・大学院で英語・英語学を学び、その後イギリスの大学に留学して一般言語学・音声学を学ぶことになるが、筆者の研究は人生と逆の方向に進んできた。私生活が鹿児島方言（L1）→東京方言（L2）→英語（L3）と進む一方で、研究の方は英語→日本語（東京方言）→鹿児島方言という順に逆方向に進んできている。

英語から日本語への転換となったのは20代後半のイギリス留学であった。英語音韻史を専攻するつもりでエジンバラ大学に留学したものの、一般言語学や音声学の授業を受ける中で、母語である日本語のことがわかっていないということを感じた。言語研究を志しながら、自らの母語のアクセントやリズムのことを何も知らない自分に違和感を覚え、それが契機となって日本語研究に改宗した。母語の研究は自分の直観に頼ることができて、足が地に着いた感じがしたものである。

帰国後もしばらくは東京方言の研究が中心であったが、アクセントなど直観が働かない（たとえば「橋」と「端」と「箸」の違いがわからない）自分にもどかしさを感じていた。考えてみれば筆者にとって東京方言はL2で、18歳になって初めて話した言語である。40歳に近づく頃から、里心がつかかのように自然に母方言である鹿児島方言の研究を始め、その後、高校時代の同級生達が話していた甌島方言（鹿児島県の危機方言）の研究へと広がった。本書で報告する鹿児島方言と甌島方言の分析は、主にこの20余年間の調査研究の成果である。

上で述べたように、筆者が日本語を研究するようになった契機は外国語よ

り母語のことを知りたくなかったということであるが、鹿児島方言を研究している一番の動機も、自分が母語をどのように操っているのか、その仕組みが知りたいという点にある。その背後には、日本語や鹿児島方言が人間の言語の中でどのような言語なのかという長年の疑問が存在する。一般言語学の知識が日本語や鹿児島方言をどのような言語・方言として書き出してくれるのか、それとは逆に、日本語や鹿児島方言の研究が世界の言語研究にどのように貢献できるのか。この問いを念頭に置いてこれまで研究を続けてきた。本書で問いかけたのもこの問題である。

本書を含め、筆者のこれまでの研究は4人の恩師に導かれたところが大きい。学部(大阪外国語大学)時代に日本語研究の面白さを教えて下さった(故)寺村秀夫先生、英語音韻史への関心を高めて下さった大学院(名古屋大学)時代の恩師である(故)荒木一雄先生、大学院で受けた集中講義以来、研究人生の節目節目で相談に乗っていただいた学兄の(故)原口庄輔先生、そしてイギリス留学から今日まで、一般言語学の視点から個別言語を分析することの大切さを教えて下さったBob Ladd先生、この4人の恩師との出会いがなければ今日の筆者の研究も本書もなかった。

日頃の研究では関西音韻論研究会(PAIK)、日本音韻論学会、国立国語研究所共同研究プロジェクト、これらの研究グループのメンバーに長年お世話になった。とりわけ甌島方言合同調査のメンバー(上野善道、木部暢子、久保智之、松森晶子、新田哲夫の5氏)からは大きな刺激を受けた。Ito Junko, Armin Mester, Carlos Gussenhoven, Larry Hymanの各氏をはじめとする海外の研究者との交流も、自分の研究を軌道修正する上で不可欠なものであった。

同じく本書の刊行に不可欠であったのが、方言調査に参加して下さったインフォーマントの協力である。鹿児島方言の調査では(故)窪菌信子、花牟禮靖男、花牟禮セツ子、安藤健二、安藤秋子、窪菌陸男、(故)川嶋俊雄、川嶋賢一、永田善三、中川清、中尾克己、(故)窪菌浩己の皆さんに長年にわたりお世話になり、甌島方言調査では巡田敏史、巡田千里子、巡田英三、尾崎孝一、富田康文の各氏(手打集落)と、梶原孝信、山下安義(平良集落)、横路康尚、(故)中能秀樹(中甌集落)、(故)西村勝己、浜辺常夫、川元決(桑之浦集落)、中村精人(瀬々野浦集落)の皆さんに、そして小林方言(宮崎県)の

調査では仮屋正夫、齋藤憲夫、富満文子、塚本秀子の各氏に特にお世話になった。ここに記してお礼を申し上げる。

過去 20 余年間の調査研究に対して各種研究助成金の支援を受けた。研究代表者としていただいたのは科学研究費補助金基盤研究 (A) (17202010, 22242011, 26244022, 19H00530)、同挑戦的萌芽研究 (25580098)、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」(2010～2015 年) および「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」(2016 年～現在)、稲盛財団研究助成 (2002 年)、三菱財団研究助成 (2003～2005 年) である。長年の財政的な支援に対して感謝の意を表したい。

本書の刊行にあたっては、くろしお出版の皆さん、とりわけ編集部の荻原典子氏に大変お世話になった。また国立国語研究所の非常勤研究員の皆さん (吉田夏也、溝口愛、野口大斗、高城隆一の 4 氏) には原稿の準備段階から校正に至るまで協力をいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

最後に、長年研究生活を支えてきてくれた妻と 3 人の子供達に感謝の気持ちを伝え、本書を今は亡き母窪蘭信子に捧げたい。

2020 年 7 月
東京・国分寺にて
窪蘭晴夫

目 次

	まえがき.....	i
序 章	本書の概要.....	1
第 1 章	類型論的観点から見た日本語のプロソディー.....	7
1.1	アクセントの型.....	8
1.2	アクセントの実現領域.....	15
1.3	音節とモーラ.....	19
1.3.1	測る単位と担う単位.....	19
1.3.2	シラビーム方言.....	28
1.4	計算の方向性.....	30
1.5	複合語のアクセント規則.....	37
1.6	アクセントの弁別の特徴.....	43
1.7	単起伏と重起伏.....	48
1.8	疑問のイントネーション.....	51
1.9	まとめ.....	54
	補遺 1 甌島方言.....	57
第 2 章	アクセントと音節構造.....	59
2.1	鹿児島方言のアクセントと音節構造.....	60
2.1.1	アクセントの恣意性.....	60
2.1.2	語種とアクセント.....	64
2.1.3	アルファベットのアクセント.....	67
2.1.3.1	単独発音.....	67
2.1.3.2	アルファベット頭文字語のアクセント.....	69
2.1.3.3	アルファベット複合語句のアクセント.....	71
2.1.3.4	アルファベットと外来語.....	73
2.1.4	考察.....	77

2.1.4.1	アルファベットのB型アクセント	77
2.1.4.2	語種間の干渉	83
2.1.5	まとめ	85
2.2	アルファベット頭文字語のアクセントと音節構造	86
2.2.1	東京方言	87
2.2.2	大阪方言	92
2.2.3	甌島方言	94
2.2.4	長崎方言	100
2.2.5	方言の比較と一般化	104
2.3	アクセントと二重母音	109
2.3.1	二重母音の定義	109
2.3.2	鹿児島方言	111
2.3.3	小林方言	113
2.3.4	甌島平良方言	114
2.3.5	甌島手打方言	116
2.3.6	甌島桑之浦方言	119
2.3.7	東京方言	121
2.3.8	まとめ	123
2.4	鹿児島方言のモーラ性	125
2.4.1	鹿児島方言の音節性	128
2.4.1.1	アクセント規則	128
2.4.1.2	母音融合	132
2.4.2	外来語アクセント	133
2.4.3	「の」の縮約	135
2.4.3.1	3つの方策	135
2.4.3.2	東京方言との比較	141
2.4.4	疑問と呼びかけのイントネーション	146
2.4.5	まとめ	149
2.5	シラビーム体系の発達	150
2.5.1	甌島方言の音節性	150
2.5.2	甌島方言の重起伏と音節性の強化	156
2.5.3	モーラ方言から音節方言へ	159
	補遺 1 調査1で用いたアルファベット頭文字語	161
	補遺 2 東京方言調査で用いたア頭文字語	162
	補遺 3 二重母音調査の語彙	162
	補遺 4 属格助詞「の」の縮約調査語彙	167

第3章	アクセントの変化	169
3.1	初期調査	170
3.1.1	鹿児島方言のアクセント体系	170
3.1.2	調査方法	172
3.1.3	調査結果	176
3.1.4	分析	177
3.2	複合法則の崩壊	181
3.2.1	調査の概要	181
3.2.2	予想と着眼点	185
3.2.3	調査結果と分析	187
3.2.3.1	中高年層	187
3.2.3.2	若年層	189
3.2.4	まとめ	192
3.3	他のアクセント変化現象	193
3.3.1	「お+名詞」のアクセント	194
3.3.2	平板式の外来語	196
3.3.3	人名のアクセント	199
3.3.4	「X太郎」「X次郎」のアクセント	203
3.3.5	他のアクセント規則	214
3.3.6	まとめ	219
3.4	他の方言—アクセント変化の一般性—	223
3.4.1	長崎方言	223
3.4.2	倉吉方言	227
3.4.3	大阪方言	230
3.4.4	まとめ	233
3.5	アクセント変化の基底原理	234
3.6	母方言への含意	242
3.7	結びと今後の展望	244
	補遺 1 初期調査の調査語彙	246
	補遺 2 人名「...子、...男、...也」の前部要素	247
	補遺 3 「お+名詞」	247
	補遺 4 「お+名詞」	247
	補遺 5 4モーラ外来語	247
	補遺 6 動詞・形容(動)詞から派生した人名	248
	補遺 7 「X太郎」と「X次郎」	249
	補遺 8 1音節名詞	250
	補遺 9 「-ia」の地名・国名	252

補遺 10 「-in」の薬品名	252
補遺 11 「-ing」の名詞	252
補遺 12 2 モーラ + 2 モーラの複合語短縮形	253
補遺 13 「X一」「X二」「X三」の名前	253
第4章 文のプロソディー	255
4.1 語のプロソディーと文のプロソディー	256
4.2 アクセント句の拡張	263
4.2.1 助詞の振る舞い	263
4.2.2 助詞の併合	268
4.2.3 アクセント句の融合	270
4.3 疑問のプロソディー	280
4.3.1 基本型	280
4.3.2 5種類の疑問文	282
4.3.3 不定詞のアクセント変化	289
4.3.4 終助詞の脱落とアクセントの中和	294
4.4 強調のプロソディー	298
4.4.1 強調疑問文	298
4.4.2 他の強調構文	306
4.4.3 アクセント句拡張の一般性	309
4.5 呼びかけのプロソディー	314
4.5.1 呼びかけ文の諸相	314
4.5.2 鹿児島方言の呼びかけイントネーション	316
4.5.3 他の方言の呼びかけイントネーション	327
4.5.3.1 小林方言	328
4.5.3.2 甕島方言	328
4.5.3.3 東京方言	333
4.5.4 一般言語学への含意	336
補遺 1 疑問文調査例文	340
補遺 2 呼びかけ調査語彙例	343
結び	345
参考文献	349
索引	359
英文要旨	367

序 章



本書の概要

本書は日本語のアクセントとイントネーションを、鹿児島方言およびその近隣方言と東京方言の調査研究をもとに、一般言語学と対照言語学の視点から分析したものである。アクセントとイントネーションはともに音の高さ（ピッチ）が作り出す音声現象であるが、語の特性（アクセント）か、句や文の特性（イントネーション）かという違いを持つ。本書は計4つの章からなり、最初の3つの章では主にアクセントを、最後の第4章ではイントネーションを考察する。

いずれの章も過去20余年間に日本語で書いた論考、英語で書いた論考、そして今回新たに書き下ろした原稿の3つがもとになっている（前2者については文献欄を参照されたい）。日本語や英語で発表していた論考についても、今回データと分析を再検討し、また最近の研究動向を踏まえて少なからず改稿を行った。また open data science の一歩として今後の検証が可能になるように、調査に用いた語彙・例文を章末の補遺に記載し公開することにした。

第1章は本書全体のイントロとして、日本語のアクセント体系と疑問イントネーションを考察する。東京方言と鹿児島方言のプロソディー体系を他の言語や日本語の他の方言と比較しながら、日本語を類型論的観点から位置づけることを試みたい。具体的には弁別的なアクセント型の数（一型、二型、多型...）、アクセントの実現領域（語か句か）、アクセント計算の基本単位（モーラか音節か）とその方向性（左から右か、右から左か）、複合語アクセントの特性（左側優位か右側優位か）、アクセントの弁別特徴（ピッチ下降

第 1 章

類型論的観点から見た 日本語のプロソディー

この章は本書全体の序章として、対照言語学、言語類型論の観点から日本語と鹿児島方言のプロソディー体系を概観する¹。先行研究を踏まえて、他の言語・方言との異同を考察することにより、日本語および鹿児島方言の特質を考察してみたい。具体的な着眼点は次の 8 点である。

- (1) a. アクセントの型がいくつあるか。(1.1 節)
- b. 語のアクセント型が文節²にまで拡張するか、それとも語のみを領域とするか。(1.2 節)
- c. アクセントの計算においてモーラを数えるか、音節を数えるか。(1.3 節)
- d. アクセントを語句の左端（語頭、句頭）から計算するか、右端（語末、句末）から計算するか。(1.4 節)
- e. 複合語のアクセントが語頭要素、語末要素のいずれによって決まるか。(1.5 節)
- f. 弁別的な特徴は何か。ピッチの上昇か下降か。(1.6 節)
- g. 語のレベルでピッチの山は 1 つ（単起伏）か 2 つ（重起伏）か。(1.7

1 この章は Kubozono (2012b, 2018f) の内容を加筆修正したものである。

2 文節とは名詞や動詞などの内容語（自立語）に助詞・助動詞などの機能語（付属語）が結合した文法単位であり、たとえば「私のいとはアメリカのカリフォルニア州に住んでいる。」という文は「私の／いとは／アメリカの／カリフォルニア州に／住んで／いる」という 6 つの文節に分けることができる。

第2章

アクセントと音節構造

第1章では類型論的視点から日本語のプロソディー体系を分析し、その中に鹿児島方言とその周辺方言を位置づけた。第2章では、日本語におけるアクセントと音節構造の関係を様々な視点から考察する。

日本語の多くの方言においてアクセントは弁別的であり、同一体系内に複数のアクセント型が許容される(1.1節)。そのような体系において、どの語がどのアクセント型に属するかは基本的には語彙的なものとされてきた。つまり複合語などの派生語(derived word)を除き、語のアクセントは方言ごとの辞書(レキシコン)で定まったものであり、子供が1つ1つ覚えなくてはいけないものと考えられている。そこで問題となるのが、子供がどのようにしてアクセントを習得するのかという問題である。

この章の最初の2つの節(2.1～2.2節)ではこの問題を解く糸口として、EU, BBC, NHKといったアルファベット頭文字語(以下「ア頭文字語」)のアクセントを音節構造やモーラ構造の視点から分析する。2.1節ではまず鹿児島方言のア頭文字語のアクセントを分析し、この方言のアクセントがこれまで考えられてきたよりも大きく音節構造や語種と関係し、後者から前者を予測できる側面があることを指摘する。続く2.2節では、この分析を東京方言、大阪方言、甕島方言、長崎方言に広げ、モーラや音節の情報がアクセント型の決定にどのように関わっているか考察する。あわせて、方言間の異同が生じる理由を検討してみたい。

本章の後半(2.3～2.5節)では、これとは逆のアプローチで、アクセントのデータをもとに日本語の音節とモーラに関わる諸問題を考察する。2.3節

第3章

アクセントの変化

現存する 6,000 の言語が今世紀末には 300 ～ 600 になってしまうとされている (Krauss 1992)。わずか百年の間に、少数民族の言語を中心に世界の言語の 90 ～ 95% が絶滅してしまうという予測である。人類史上かつてない規模での大量消滅の事態を前に、世界中の言語学界では絶滅の危機に瀕した少数民族言語の記録・保存が声高に叫ばれ、そして実際に UNESCO や各国政府の支援を受けていくつかの研究プロジェクトが進められている。しかし危機に瀕した言語は少数民族の言語だけではない。日本国内に目を転じると、教育・マスメディアの普及や人の移動といった社会的な要因によって、日本語を特徴づけていた方言の多様性が崩れ、多くの方言が標準語（東京方言）に呑み込まれようとしている。社会言語学的に見れば、2 言語（方言）併用—いわゆるバイリンガリズム (bilingualism)—によって地域方言が変容してきているのである。

他方言に比べて方言体系を維持しているように見える鹿児島方言もその例外ではない。「げんなか」(＝恥ずかしい)、「てそか」(＝疲れた)、「うんもなか」(＝まずい)、「ほがなか」(＝馬鹿だ)、「ずんばい」(＝たくさん)、「おじゃる」(＝いらっしゃる)といった俚言(方言語彙)の衰退は言うに及ばず、同じ地域の話者でも年齢によるアクセント差が甚だしい。たとえば「紅葉」という語は、かつてモミ[ジ(低低高)]というアクセント型で発音されていたが、今では中高年層を含め多くの話者がモ[ミ]ジ(低高低)と発音している。一方「楓」という語は、若年層においてカ[エ]デ(低高低)からカエ[デ(低低高)]へとアクセントを変化させてきている。両者のアクセント型が逆に

第4章

文のプロソディー

前章までは「語」の音韻特性である「アクセント」を中心に日本語および鹿児島方言のプロソディー体系を考察した。この章では、語から句、節、文へと視野を広げて、「文」のプロソディーを分析する。どの言語でも、文全体のプロソディー構造 (sentence prosody) は、語のプロソディー (word prosody) が基盤となって、そこに句や文のレベルで起こる音韻現象 (イントネーションやリズム) が覆い被さる形で決まる。この章で論じるのはこの後者の現象であり、またそれに伴って起こる語アクセントの変化である。

鹿児島方言に限らず、日本語のプロソディー研究はこれまで語レベルの分析が中心であった。イントネーションの研究はアクセントの研究ほど盛んではなく、とりわけ語アクセントと文のプロソディーの関係を探る研究は少なかった。この中でも、文レベルのプロソディー現象が語のアクセントにどのような影響を及ぼすかという研究は少ない。語プロソディーは文のプロソディーに影響を与えるが、その逆方向の影響はないという暗黙の理解があったように思われる。ところが諸方言のプロソディー研究が進むにつれ、文レベルの要因・構造を考慮しないと語アクセントの特徴が適切に理解できない事例がいくつか報告され始めている。この章では鹿児島方言の分析を中心に据えて日本語における語と文のプロソディーの関係を探り、その結果を通言語的な視点から考察する。

具体的には4.1節において、語のプロソディーと文のプロソディーの関係を俯瞰し、その全体像を踏まえて、4.2節以下で鹿児島方言の文プロソディーを分析する。4.2節ではこの方言の「1文節=1アクセント句」という